

常光寺々報

2017/11

報恩講法要

十二月三日(日)

朝十時半〜十二時

昼一時半〜四時

前築地本願寺宗務長

元中央仏教学院院長

講師 北畠 晃融 先生

念仏は、私たちの生活に実益はもたらさないが、「これだよかったのだ」というふうには必ずしてください。

(桐溪 順忍)

お昼には、手作りのお齋(食事)ができません。親鸞さまと一緒にいただきます。

ご講師の北畠晃融先生は、二年前まで築地本願寺の宗務長をされていきました。それ以前は、京都の中央仏教学院の院長を八年余りお勤めでした。

副住職の亮慧が先生にご指導を受けたのは研究科のときで、先生がまだ院長になれる前だったようです。この度は、そんなご縁で副住職が直接、先生にご出講のお願いをしてくれました。

初めてのご縁なのに、先生にはとても気持ちよくご承諾をいただきました。皆さまも、このご縁を大切にされて、お誘い合わせてお参りくださいますようご案内申し上げます。(先生は今年、古希を迎えられます。ご自坊は大阪の茨木市ですが、出身は山形県と伺っています。)

暮らし立たなきや

始まらぬ

暮らしよくなりや

浮き世にのぼせ

大事な生死を しくじるに

どなたの詩だか知りませんが、人生には二つの大きな問題があることを教えてくれています。一つは生活の問題、もう一つは生死の問題です。

生活はお金がないと何も始まりません。そのために、みんな懸命に働きます。でも、生活がよくなればそれでいいかというと、人生にはまだまだ多くの不安があります。中でも生死の不安はその根本です。

浮き世の事にのぼせて、快樂に耽り、大事な「生死の問題」を忘れていくと、空しく一生を過ごすことになるぞ、とのお諭しなのでしよう。

地獄のはなし

司馬遼太郎さんは、『街道を行ゆく』の中で白川郷に住んでいた赤尾の道宗のことを紹介されています。

「道宗はこの山里からしばしば京にかけのぼっては蓮如の説法を聞いた。中略・またおなじ説法を何度聞いてもそのつど驚嘆するという精神をつねに用意していたともいわれる。」などと紹介されてから、

「道宗は入信以前の若い頃、たまたまイワナを食っていて愕然と箸を置き、このように生類を殺して食っている、後生は地獄ではなかるうかと戦慄した。」と言われていることを取りあげて、そして、

「地獄をおそれるといふことが人間社会から消滅して以来、人間はひよつとすると偉大さというものをうしなつたかもしれない。」と言われています。

さらには、「ある意味では、かれや、かれのころの白川谷のほうが今よりもより文明的といえるのではないかとさえ思える。」とまで言及されています。

私たちは今、地獄をどのように捉えているのでしょうか。直接、地獄のはなしに結びつきませんが、本願寺新報に徳永先生が罪業について、「現代という時代を生きる私どもは、この「罪業」という意識をどこかに置き忘れていると言ってもよいのではないだろうか。」と書かれています。地獄もまたどこかに忘れられてしまったようです。

* * *

明治の親鸞とも言われた清沢満之は、「われらの大迷は如来を知らざるにあり」と言っています。如来を知ることと自己を知ることとはある意味同じですから、私たちの迷いの根源は自己を知らないところにあるとも言えるでしょう。現代社会が自己主張ばかりして自

己を否定する力が欠けているのも、あるいは地獄の思想が失われているからかもしれません。

梅原猛さんの『地獄の思想』を読むと、「地獄と極楽は別の思想であり、しかも、地獄は極楽よりも広くて、極楽よりも近い。」「地獄思想は、仏教においてかなり早くから現れる。それに比べて、極楽の思想が出てくるのは紀元後一世紀ころなのである」とある。そして、「地獄の思想のなかには、もっと深いなにかが、近代人が見失おうとしながら、なおかつ人生の真実であるなにかがかくれているのではないかと、示唆されています。

その「なにか」とは何か。その一つは人間としての当然もつべきいのちに対する畏怖の念ではないだろうか。私たちは地獄の思想を捨てて、いのちの畏敬の念まで失ってはいないだろうか。